

## 串柿業の事物連関の変容 その②

-氷見市久目地域の串柿業の時代区分による事物連関の比較考察-

正会員	○栗原 稜*1	正会員	今泉 優希*5
正会員	北島 陽貴*2	正会員	重山 隼人*1
正会員	藪谷 祐介*3	準会員	梶田 美結*6
正会員	有原 千尋*4		

生業	地域づくり	資源
小屋	富山県	冬仕事

## 1. 研究の背景と目的

前編では富山県氷見市久目地域(以下、久目地域)の串柿業の歴史整理を行い、1966年のJA氷見市誕生を境に串柿業の効率化が図られ、串柿業の生産工程に大きな変化をもたらした事を明らかにした。この事から1966年以前を繁栄期、以降を効率化期とする時代区分を設けた。本編も前稿同様、文献調査と串柿農家、JA氷見市職員へのヒアリング調査を行い、前編で設けた時代区分に基づき2つの事物連関図を作成し、それらを比較することで事物連関の変容を明らかにすることを目的とする。

ヒアリングを行った3軒の中で中間(棚懸集落)に位置するB氏を代表的なものと仮定し、適宜他の串柿農家へのヒアリング内容も参照しながら久目地域における串柿業の事物連関図を作成する。

表1. ヒアリング対象者と各居住地の標高

A氏	B氏	C氏
坪池 (標高200m-)	棚懸 (標高100m~200m)	一の島 (標高50m~150m)

## 2. 串柿業の事物連関

本章では、作成した繁栄期(図1)と効率化期(図2)の事物連関図をもとにして、久目地域の串柿業に関わる事物連関の実態とその変容を考察する。

## 2-1. 繁栄期(図1)

まず繁栄期を見ると、柿の木は当時点在して植えられていた頃もあったが徐々にまとまった土地に植えられるようになった。収穫された柿は母家に隣接する作業場に持って行き、皮むき、串差し、縛りを終えたものを母家から離れた寒冷な自然風の当たりやすい場所に運び、柿つり小屋での自然風を用いた乾燥を行っていた。さらに標高の低いC氏の場合、作業場を柿つり小屋の近くに設け、寝泊まりしながら管理を行っていた。串柿に使われる串棒は地域に植生するダイホウ(通称: タニウツギ)の新芽を刈り取ったものを皮を剥き1年ほど乾燥させたものである。また小屋の材料は山に生える栗の丸太と茅だったという。栗の木は腐りにくく、丸太を直接地面に突き立てて柱にする(掘立)ことに適していた。茅は屋根

材に用いることで直射日光を遮りつつ通気性を確保し、変色を防ぎつつ柿の水分を抜くための工夫がされていた。2週間の自然風を用いた乾燥を終えた串柿は再び納屋へと運ばれ、囲炉裏の熱で仕上げ乾燥を行っていた。(A氏の場合、練炭で仕上げ乾燥)。そうして仕上がった串柿は地域住民、または仲卸業者によって買い取られ県内外の小売店へと卸され、一般家庭や寺社仏閣などへと流通し、正月に納屋、神棚、仏壇、床間、玄関、台所など数多くの場所で飾られ消費された。

## 2-2. 効率化期(図2)

続いて効率化期を見ると、複数の連関が消失したり、変化したりしているのが分かった。繁栄期と同様、柿畑から作業小屋に運び、皮むき、串差し、縛りを終えたものを柿干し場に運ぶ作業工程は変わらないが、柿干し場の位置と形式に大きな変化がある。効率化期における乾燥は自然風を用いずに練炭のみを用いるため柿干し場の位置は自由になった。そのため作業動線の効率化の観点から母家と同じ敷地内に簡易的なプレハブ小屋が建てられ、柿つり小屋は使われなくなった。それにより柿つり小屋の材料であった地域の山林資源や地域を吹く寒冷な自然風との連関は断たれた。乾燥に練炭を用いることになった理由としては、安定した品質の管理と乾燥時間の短縮であり、これにより効率化が図られている。また、出荷の際には安定した品質管理の観点や、串柿組合が1976年に発足したことも関連し、久目地域で生産された串柿は、一度集荷倉庫に集められ、検査を終えた後に久目の串柿として富山、高岡、石川の市場に卸されるようになった。その後、仲買業者によって各小売店へと卸され、消費者の元へと流通する仕組みとなった。そうした中で生産者と消費者の連関はより間接的なかたちに変化したことがわかる。その上、繁栄期から効率化期への時代の流れの中では仏心の衰退や家の形式の変化が起こり、一般家庭における串柿の消費量は低下しているため、消費者との連関はますます弱まっていることが伺える。

また細かな変化を見ていくと、繁栄期においては肥料を用いずに柿を育てていたが、効率化期においては安定して柿を収穫するためにそさい(化成肥料)と鶏糞を仕入れて肥料として用いている。これは新たな連関として見てとれるが、他の生業との直接的な連関でなく、JA氷見市久目支所を介した間接的な連関となっている。

### 3. 久目地域における串柿業の事物連関の考察・まとめ

本研究では、串柿業の事物連関において、JA氷見市久目支所ができた1966年以前を繁栄期、以降を効率化期として事物連関図を作成し比較することで、複数の連関の

消失が起きていることと、その要因として効率化と衛生面での対応が背景にあることを明らかにした。串柿業がこれまで家業として受け継がれてきたことは、事物連関の繁栄期においても他者や他の生業との連関があまり見られない要因の一つとして考慮すべきことだが、干し場の形式と位置の変化が串柿業をより視覚的・領域的に閉じた生業に変化させており、地域住民を含む消費者との関係性希薄化を生じさせている可能性が推察される。このことが今後の串柿を用いた地域づくりにおいて課題になると考えられる。

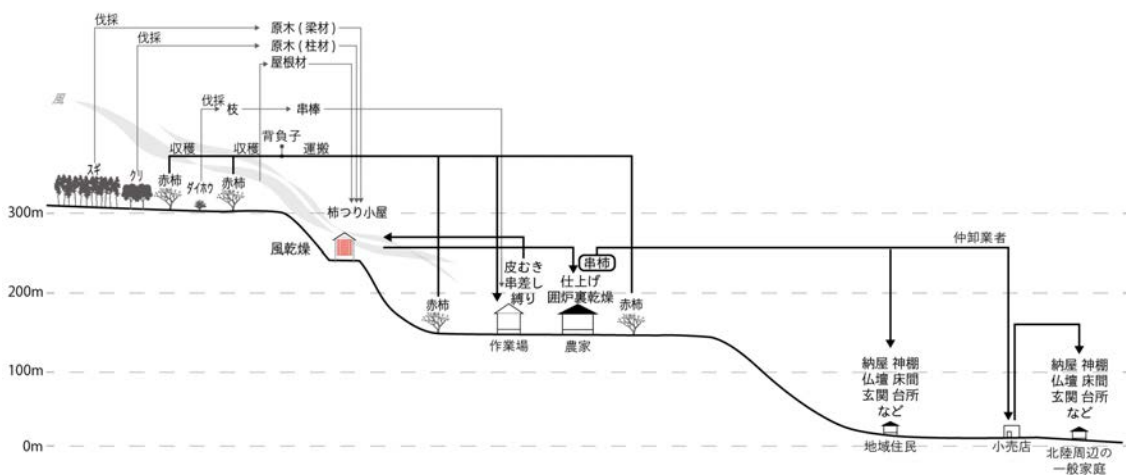


図1.串柿業の事物連関図：繁栄期

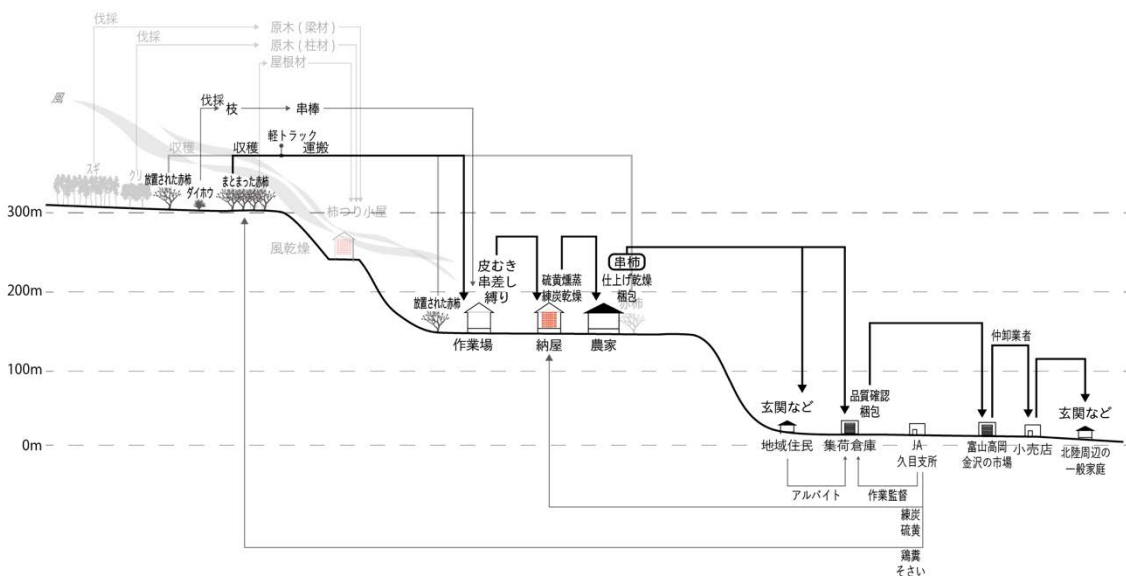


図2.串柿業の事物連関図：効率化期

- \*1 江寄建築
- \*2 富山大学人文社会芸術総合研究科 大学院生
- \*3 富山大学学術研究部芸術文化学系 講師
- \*4 公益財団法人金沢芸術創造財団
- \*5 株式会社ホリエ(シエルホームデザイン)
- \*6 富山大学芸術文化学部学部長

- \*1 Ezakikenchiku
- \*2 Students, Graduate School of Humanities, Arts, and Social Sciences, University of Toyama
- \*3 Lecturer, Faculty of Art and Design, University of Toyama
- \*4 Kanazawa Art Promotion and Development Foundation
- \*5 Horie Corporation (ciel HOME DESIGN)
- \*6 Undergraduate, School of Art and Design, University of Toyama